

「アレルゲン害虫のはなしーアレルギーを引き起こす虫たちー」

川上 裕司 (編)

149ページ, 定価3300円 (税抜)
(朝倉書店, 2019年12月1日刊行)

近年、昆虫やダニ類の話題は尽きない。TVでは、スズメバチ駆除業者への密着番組が繰り返し放映され、渋谷にリニューアルオープンした商業ビルの「昆虫食レストラン」の開業が大きく取り上げられた。またヒアリやマダニ、デング熱やジカ熱などの話題は、徐々に常態化しているようにも思える。そのような中、我々の生活の中にひっそりと潜み、しかし時にはその存在を大きく意識させる虫たちについての本が出版された。

本書の帯には、国立病院機構相模原病院 谷口正実先生の推薦文があるが、「室内昆虫のアレルゲンが重要であることはほとんど知られていない」と書かれている。確かに、スズメバチによるアナフィラキシーショックやダニがアレルゲンであることは有名であるが、そのほかの昆虫等については、そもそもアレルゲンであるのかどうかさえも知らない。さて、どんな虫たちが取り上げられているのか、と本書を開いた。

本書では、生活環境あるいは職業的な曝露事例からこれまでにアレルゲンとして報告されている、あるいは今後懸念される昆虫やダニ類について、形態的特徴や生態が紹介されており、昆虫図鑑を楽しむように読んだ。もちろん、どのような成分がアレルゲンとなっているのか、対処法はどうすればいいか、ということも書かれている。読み進むうちに、自宅の米びつに発生したのはノシメマダラメイガのようだと気づいたり、シミが7～8年も生きるとは！と驚いたり。さらにはトビケラ類の大量発生が水力発電の出力低下を起こすということや、職業性曝露を受ける人の多くは昆虫飼育者であることなど、知的好奇心を刺激する話題であふれていた。我が家ではノシメマダラメイガの“食べ残し”の米を炊飯していた時もあったが、彼ら由来のアレルゲンを口にしていたのか、という気付きもあった。

本書に記載されている昆虫やダニ類がアレルゲンとして重要なのは、彼らが持つタンパク質に加え大量発生する点であり、そのための環境が意識せず整えられていることも改めて認識した。また、彼らの体に付着しているカビ類との複合曝露も懸念されており、この点から昆虫やダニ類を意識することは重要なことと考える。参考文献も最新のものが引用され、索引もあることから、本書は解説書でありまた実用的な1冊である。

(産業医科大学産業保健学部作業環境計測制御学 石松 維世)

